

生態系保持空間の生き物と自然再生工事

森川正昭

多摩川と浅川の合流点に生態系保持空間(約 27.1ha)という地域があり、ここは国土交通省が昭和55年、動物や植物などが生息・生育する地域として特に保全することが必要と認めた場所で、それだけ豊かな自然が保たれており、多くの生き物を見る事ができます。今回、そこに見られる生き物を少し紹介するとともに、今、その場所が礫河原を再生するという名目で大きな工事が行われており、その工事について考えて見たいと思います。

日野市の中で手つかずの自然が残る多摩川生態系保持空間には、市内ではここで見ることが出来ない多くの生き物が生息しています。



生態系保持空間の範囲とその場所を石田大橋からと多摩川の堤防から見る



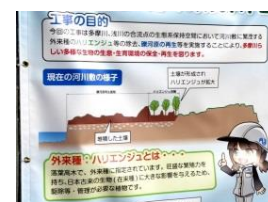
春は保持空間が一番美しい季節、河川林の中には、ヤマザクラが咲き、林床にクサノオウが一面に咲く。クワの花に珍しいセスジヒメハナカミキリや多くの昆虫類が蜜を吸いに来る。可愛いイタチの姿も現す。

初



初夏にウラゴマダラシジミ、コムラサキ、キハダカノコ、ヤホシホソマダラ、カスリウスバカゲロウ等の珍しい昆虫たちが舞う。ノスリ、オオタカが木々の枝に止る。

この美しい自然が残るこの場所を、礫河原を復元するという名目の自然再生工事が行われている。



昨年の11月末から始まった工事で、殆どの河川林は伐採され一面の原野に変わった。更に、この場所を掘り下げて、礫河原にすることにより、そこに、河川敷本来の植物の種が飛来し、多摩川本来の自然に戻ると言う。しかし、それは本当であろうか。



無残に伐採され、原野に変わった生態保持空間の河川林、そこに豊かな自然はもう無い。



2年前にも、これより上流で、同じ様な工事が行われた場所は、一旦は礫河原になったが、今はシナガタレスズメガヤ等の外来植物がはびこる不毛の原野になっている。





一旦は礫河原になるが2年後の今はシナダレスズメガヤのはびこる不毛の原野

今、国土交通省は、多摩川の各地で、外来種(ハリエンジュ)の伐採や礫河原の再生等を行うことにより、多摩川らしい多様な生き物の生育・生息環境の保全・再生を行うという理由で、このような工事を行っています。しかし、今見て来たように、2年前に同じような工事を行った場所は、今、外来種のシナダレスズメガヤで覆い尽くされた不毛の原野になっています。一見、礫河原にすることに依って、本来多摩川に生えていた植物の種子が散布され、多摩川本来の生態系が戻って来ると思われますが、礫河原にすることに依って、そこはシナダレスズメガヤやハリエンジュ等の外来種の格好の繁殖地になっているのではないだろうか。また、多摩川には、植物以外にも河川敷特有の昆虫ほか多くの種類の生き物が生息しております。これらの生き物を度外視し、一方的にこのように乱暴な工事を行うことは、自然を守る会の立場から決して許させることではないでしょう。そして、今回の工事が果たして、国土交通省が言うように、本当に多摩川らしい多様な生き物が戻って来る自然再生工事であったのか、これらかも見つめていく必要があると思います。

2017.1.17 生物多様性地域戦略策定委員会資料

森川正昭